

令和元年5月29日現在

機関番号：11401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K17466

研究課題名(和文) 学齢期のASD児における社会的相互作用の発達の变化に関する横断的・縦断的研究

研究課題名(英文) Developmental changes in social interaction in school-age ASD children

研究代表者

鈴木 徹 (Suzuki, Toru)

秋田大学・教育文化学部・講師

研究者番号：10735278

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：自閉症スペクトラム障害の中核的な障害の1つに社会的相互作用の困難がある。これまで学齢期において様々な問題が起きることが指摘されてきたが、問題の質の違いについて具体的な検討は行われてこなかった。本研究では、自己/他者理解の程度に着目し、それらの程度によって社会的相互作用の問題の様相が変わることを特別支援学校での実験調査と教員への半構造化面接の実施により明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、自閉症スペクトラム障害児の社会的相互作用の障害を、自己理解と他者理解という2つの側面から捉え、それらの程度によって社会的相互作用場面の様相が変わることを明らかにした。本研究から得られた知見は、自閉症スペクトラム障害児の社会的相互作用の障害に対する体系的な支援体制を構築していく上でも、また、発達段階における自己理解と他者理解の連関を検討していく上でも貴重な資料となり得る。

研究成果の概要(英文)：Children with autism spectrum disorders have social interaction difficulties. It has been pointed out that various problems occur in social interaction during school age. However, no specific consideration has been made about the change in the appearance of the problem. In this study, it was clarified that the degree of self / other understanding is related to the appearance of social interaction problems.

研究分野：特別支援教育

キーワード：自閉症スペクトラム障害 社会的相互作用 自己理解 他者理解

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

自閉症スペクトラム障害 (以下、ASD と記す) 児における中核的な障害の 1 つに社会的相互作用の障害がある。ASD 児の多くが学校生活において級友と頻繁にトラブルが生じている。このような社会的相互作用の障害に関しては、心の理論課題における課題成績の低さを根拠に、他者理解の困難が要因として想定されてきた (Baron-Cohen et al., 1985)。その一方で、心の理論課題において良好な成績を示す ASD 児にも他者とのトラブルが確認されることが指摘されてきた (Bowler, 1992)。この指摘は、他者理解以外の要因がトラブルを引き起こしている可能性を示唆するものではあるが、この可能性について具体的な知見は得られてこなかった。

ところで、ASD 児における自己理解に関する領域では、過去の体験を想起することの困難 (Millward et al., 2000) や内省の困難が指摘されており、これらの自己理解の側面は上記の可能性の 1 つになり得るものであった。これまで申請者は、社会的相互作用における「自己の行為が他者に与える影響の理解」に着目し、社会的相互作用において自己の行為に対する注目や気づきの困難といった、自己理解の困難が様々な問題を引き起こすことを明らかにしてきた (鈴木ら, 2013; 鈴木ら, 2014a)。

ただし、Happé et al. (2006) が ASD を一つの要因から包括的な説明を試みるのは難しいと指摘しているように、社会的相互作用において生じる問題を自己理解の困難という単一の枠組みから説明するのは難しい。実際、個別事例の社会的相互作用場面の様子の経年変化に着目すると、1) 社会的相互作用の問題は他者理解の困難と自己理解の困難に起因する二つの性質がある、2) 他者理解の困難から自己理解の困難へと社会的相互作用の問題の性質が変わることが分かった (鈴木ら, 2014b)。これらのことから、ASD 児の自己/他者理解の程度に着目し、それらが社会的相互作用場面にどのように反映されるのかを検証する必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、ASD 児における自己/他者理解の程度が社会的相互作用場面でどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

1) ASD 児の自己/他者理解の程度については各種課題を実施して測定する、2) 社会的相互作用場面の様子については教員への半構造化面接を実施することとした。

1) について

A 市と B 市の知的障害特別支援学校中学部・高等部に通う口頭でのコミュニケーションおよび文字の読み書きが可能な ASD 児 23 名、知的障害児 16 名を対象とした。ASD 児の平均生活年齢 (CA) は 16 歳 3 ヶ月、レーヴン色彩マトリックス検査 (RCPM) の得点は平均 30.5 であった。知的障害児の平均 CA は 15 歳 6 ヶ月、RCPM の得点は平均 25.0 であった。なお、本研究を実施するにあたり、保護者に対して課題のねらいや手続きを書面で説明し同意を得た。本人に対しては課題の概要を口頭で説明し同意を得た。

自己理解課題として、「すごろく課題 (鈴木ら, 2014a)」を実施した。他者理解課題として、「アニメーション版 “心の理論課題” (藤野, 2005) におけるボールのもんだい (一次の誤信念課題)」を実施した。

2) について、

3. 対象児の社会的相互作用の様子に関する教員を対象とした半構造化面接

学校教員 2 名を対象に半構造化面接を実施した。実施に先立ち、ASD 群と知的障害群の自己/他者理解課題の成績について、課題を通過した場合に「高」、不通過であった場合に「低」とし、自己/他者理解の程度を 4 群 (自己/他者・高群、自己・低/他者・高群、自己・高/他者・低群、自己/他者・低群) に分けた。机上に ASD 群と知的障害群を 4 群に割り振った表を紙面に提示した上で面接を実施した。質問項目としては、1) 社会的相互作用の全体的な様子、2) 自己理解 (特に、自己の行動の理解や自他の行動の因果関係の理解) の様子、3) 他者理解 (特に、他者の心的状態に関する理解) の様子、4) 他の群と比較して目立つところ、の 4 点を尋ねた。

4. 研究成果

1) 自己/他者理解課題の成績

自己理解課題を通過したのは、ASD 群 43.5%、知的障害群 81.3%であった。両群の成績の違いについて Fisher の直接確率法による両側検定を行ったところ、群間に有意差が認められた ($p < .05$)。両群において課題通過・不通過と RCPM の得点について Mann-Whitney の U 検定を行ったところ、群間に有意差は認められなかった。他者理解課題を通過したのは、ASD 群 60.9%、知的障害群 87.5%であった。両群の成績の違いについて Fisher の直接確率法による両側検定を行ったところ、群間に有意傾向が認められた ($p < .10$)。両群において課題通過・不通過と RCPM の得点について Mann-Whitney の U 検定を行ったところ、群間に有意差は認められなかった。

2) 自己/他者理解の程度と社会的相互作用の様子

(1) 自己/他者理解の程度

ASD 群 (n=23) では、自己/他者・高群 9 名、自己・低/他者・高群 5 名、自己・高/他者・低群 1 名、自己/他者・低群 8 名であった。知的障害群 (n=16) では、自己/他者・高群は 12 名、自己・低/他者・高群 2 名、自己・高/他者・低群 1 名、自己/他者・低群 1 名であった。

(2) ASD 群における自己/他者理解の程度と社会的相互作用の様子

自己/他者・高群では、自己理解と他者理解に関する問題は殆どなく、級友と協力して行事等に取り組むことができていた。ただし、自己否定的な発言を行ったりするなど、自己評価の低さが目立っていた。自己・低/他者・高群では、他者理解に関する問題は殆どなく、級友を気遣う言動が見られた。一方、自己理解に関する問題が散見され、自身の言動が原因となっているにもかかわらず、それを省みることなく一方的に他者を責めるような言動を行っていた。このような自己理解の問題が契機となり、級友とのトラブルに発展してしまうことがあった。

自己・高/他者・低群では、群と様子は変わらず、自己理解と他者理解に関する問題は殆どなかった。自己/他者・低群では、自己理解と他者理解に関する問題が頻繁に起きていた。特に、他者の心情を傷つけるような発言などの他者理解の問題が目立っており、学級でのトラブルメーカー的な存在になっていた。自身の発言が級友を傷つけてしまったことを(教師が)伝えても、同様の発言を繰り返していた。群間の比較については、群は他の群に比べて自己理解と他者理解の問題が多く、群は他者理解の問題は少ないが群と比べると自己理解の問題が多かった。

(3) 知的障害群における自己/他者理解の程度と社会的相互作用の様子

全ての群に自己/他者理解の問題は見られず、社会的相互作用場面において協調的で級友を気遣う言動を行っていた。

3) まとめ

自己/他者理解の程度と社会的相互作用との関連について、知的障害群では、全ての群に社会的相互作用場面の自己/他者理解の問題は認められなかったことから、両者の関連はないものと思われる。一方、ASD 群では、群は自己/他者理解の問題は殆どない、群は他者理解の問題は少ないが自己理解の問題は多い、群は群と同様、群は自己/他者理解の問題が多いなど、自己/他者理解の程度によって社会的相互作用の様子が変わっていた。それらは概ね自己/他者理解の程度が低いと社会的相互作用の問題が多く、理解の程度が高いと問題が少ないという傾向を示していた。このことから、ASD 児においては自己/他者理解の程度と社会的相互作用の様子に関連があり、自己/他者理解の高・低が社会的相互作用における自己/他者理解の問題の頻度に反映されていると言えよう。ただし、群と群で社会的相互作用の様子に違いはなかった。群の 1 名は積極的に級友とかかわりを持とうとしない児童であり、対象児の特性が面接結果に色濃く反映された可能性がある。この点については、群のサンプル数を増やした上で、群と群の社会的相互作用の様子の違いについて検討する必要がある。

< 引用文献 >

- 1) Baron-Cohen, S., Leslie, A. M., & Frith, U. (1985) Does the autistic child have a "theory of mind"? *Cognition*, 21, 37-46.
- 2) Bowler, M. D. (1992) Theory of mind in Asperger's syndrome. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 33, 877-893.
- 3) Happé, F., Ronald, A., & Plomin, R. (2006) Time to give up on a single explanation for autism. *Nature Neuroscience*, 9 (10), 1218-1220.
- 4) Millward, C., Powell, S., Messer, D., & Jordan, R. (2000) Recall for self and other in autism: Children's memory for events experienced by themselves and their peers. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 30, 15-28.
- 5) 藤野博 (2005) アニメーション版心の理論課題 ver. 2. DIK 教育出版.
- 6) 鈴木徹・平野幹雄・北洋輔・郷右近歩・野口和人・細川徹 (2013) 高機能自閉症児における対人相互交渉の困難の要因に関する検討 心の理論課題を通過する事例の様相に着目して 特殊教育学研究, 51, 105-113.
- 7) 鈴木徹・平野幹雄・野口和人・細川徹 (2014a) 高機能自閉症者における自己および他者の行為とその結果の因果関係の理解. 発達障害研究, 36, 293-302.
- 8) 鈴木徹・細川徹・野口和人 (2014b) ある高機能自閉症者における対人的相互交渉と自己及び他者の行為の理解の関係. 宮城教育大学特別支援教育総合研究センター研究紀要, 9, 57-71.

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

鈴木徹、平野幹雄、自閉症スペクトラム障害児における自己/他者理解の程度と社会的相互作用との関連、自閉症スペクトラム研究、査読有り、16、2018、67-72

鈴木徹、平野幹雄、野口和人、ASD 児における他者/自己理解の程度が社会的相互作用に及ぼす影響、Journal of Inclusive Education、査読有り、1、2016、48-53

〔学会発表〕(計2件)

鈴木徹、平野幹雄、自閉症スペクトラム障害児における自己/他者理解の程度と社会的相互作用場面の関連に関する検討、日本発達障害学会第52回大会、2017

鈴木徹、平野幹雄、ASD 児における自己他者理解の程度が社会的相互作用に及ぼす影響に関する検討、日本発達障害学会第51回大会、2016

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。